

## 輝ける青春

代表取締役社長 大多和 巖

暮れの日曜日、イタリア映画「輝ける青春」を観た。2003年の第56回カンヌ国際映画祭・ある視点部門で上映され、6時間6分というけた外れの上映時間にもかかわらず圧倒的な感動と支持を得てグランプリを受賞した、とある。この映画はイタリアのごく普通の中流家庭の40年間近くにわたるさまざまな愛、試練、挫折、感動がイタリア現代史の流れの中で淡々と描かれていく。物語は1966年に始まり2003年で終わるが、当方が学校を卒業して社会人となったのが正にこの年、いろいろな思いに耽り、ひとつの時代を生きたな、との感慨を抱いているうちに、時間があっという間に過ぎてしまった。

商売半ばに癌で早世してしまう父親、家庭と教師を両立させる素敵な母親、長男は非人道的な拘束療法の改革に身を投じる精神科医に、次男は兄のように強く生きられない繊細な感情の持ち主で、結局自分を追い詰めて自ら命を絶ってしまう。長女は検事となって公害問題に取り組み、末っ子の次女は後にイタリア銀行の幹部となる長男の親友と結婚した。66年、フィレンツェの大洪水の復興活動の中で知り合い結婚して娘をもうける長男の妻は、やがて愛する全てを捨てて「赤い旅団」のテロ活動にのめり込んで行く...これらの家族にそれぞれのパートナー、友人が絡み、愛の歓びと苦悩にあふれた人生の様子がゆったりと丁寧に映し出され、その中で20世紀後半のイタリア社会が浮き彫りにされてくる。学生運動、労働争議、公害問題、医療制度、汚職、マフィアとの癒着をはじめとする政治的腐敗等々、我が国との類似点も多く妙に同時代を生きた臨場感がある。

それにしても1960年代から70年代にかけて先進資本主義国の青年、若者が経験したあの熱気は何だったんだろう。第2次世界大戦後の復興と繁栄の中で生まれてきた社会の矛盾、格差、差別の中で、社会主義、共産主義に人類の理想郷を夢見たのか...しかし、1989年にベルリンの壁が崩壊し、91年にはソビエト連邦も消滅してしまった。

世界はその後イデオロギーの対立に代わって、民族・人種・宗教の対立の構図がエスカレートしていく。IT技術の飛躍的發展は技術革新、新製品開発を伴い人々の生活を大きく変化させ、米国のプレゼンスが強まり、中国の目覚ましい経済発展もあって経済は一段とグローバル化する。

我が国もバブル崩壊からもう10年以上が経過した。金融機関の不良債権処理もようやく峠を越え企業業績も急速に回復して景気は明るさを取り戻しつつあるし、延々と続いた超低金利もようやく出口論議が賑やかになってきた。あと一歩である。しかしながら一方で、地球温暖化、環境汚染・破壊の問題が深刻となり、持続可能な社会、自然との共生が叫ばれ企業もCSRを標榜せざるを得なくなってきた。加えて、今後一段と高齢化が進み、人口減少の世界に入っていく。それにしては、我が国では青年、若者が、右でもいい、左でもいい、一体いつ頃からなのか、とにかく騒がなくなってしまった。年金、医療、教育、環境、外交等々、どれを取っても彼らの世代の将来に直接かかわる重要な問題ばかりである筈なのに、である。大いに声を出して、より良い国にしなければならない。明るい未来を展望するのが青年、若者の特権である。40年後には、どんな「輝ける青春」が描かれるのだろうか？